



## 創造を生む“破壊力”



### 新しい経験で自分が変わる

**ヤノベ** 僕は子供のころに大阪万博の跡地でよく遊んでいたんですよ。その跡地は再開発の目処もなく、「太陽の塔」をはじめとする巨大なオブジェが残る、からんとした場所でもさみしさというよりは、ドキドキするような感覚があって、自分の原風景は、まさに「未来の廃墟」といえるあの場所だったんだろうと思います。それに気づいて以来、「サバイバル」をテーマに活動してきました。象徴的なのが、ガイガー探知機のついた「アトムスーツ」。



ただ“それっぽいもの”にするのは嫌なので、実機能にこだわって、実際にそれを着てチェルノブイリに行く。そんなふうには、現実と虚実を織り交ぜながら活動してきました。

**李** 金沢21世紀美術館の「子供都市計画」(2004年)は行きましたよ。オープンしたばかりで、まだ足場を組んでいるような状態のときでしたけれど。

**ヤノベ** 「子供都市計画」は、「森の映画館」という、子供のためのシェルターとしての映画館を作ったことをきっかけに構想が始まったんですよ。普通は完成してからお披露目するんですけど、あのプロジェクトは完成までの過程を見せるのが目的で、半年間滞在しました。

**大宮** 何からのシェルターなんですか？

**ヤノベ** もともとは「放射能から」ですが、もっと広義に、自分の身を守るために肉体的にも精神的にも強くなるというイメージですね。

**李** チェルノブイリに行かれたのはいつ頃ですか？

**ヤノベ** 10年くらい前です。自分の原体験が「未来の廃墟」にあるんじゃないかと考えるようになってからしばらくして、チェルノブイリに遊園地があることを知ったんですよ。それも「未来の廃墟」かなと思って実際に行ってみたら、子供も老人も住んでいて、とてもロマンチックなものではなかったんですけど…。

**大宮** それって、危険なところですよね？

**ヤノベ** そう、住んではいけないはずの危険地帯です。でも住まざるを得ない事情があったり、老人たちは住み慣れた場所に愛着があったりして、たくさんの方が住んでいるんです。そこで、自分の中のテーマがかなり大きく変わりました。

**李** 「サバイバル」から、どのように変わったんですか？

**ヤノベ** 「リバイバル」に。自分に子供ができたというのもあると思います。僕は子供のころ、大阪万博の跡地で夢をもらった。今度は、自分が子供たちに、次の未来を見せていこうと。そして2003年に大阪万博跡地の国立国際美術館で展示会をしたとき、それまで僕の一番のキャラクターだったアトムスーツを封印したんです。「太陽の塔」というのは子供のころからずっと見ていた巨大なモニュメントなんです。自分がアーティストとして活動するようになって、岡本太郎という存在の大きさを意識するようになった。彼と対峙するような気持ちでなければ、跡地で展示会を開催することはできないと思ったんです。



です。そこで、アトムスーツを着てゲリラ的に「太陽の塔」に上ったんですが、実はその2003年という年は、「太陽の塔」の裏テーマともいえる「明日への神話」が発見され、さらに鉄腕アトム生誕の年でもあった。鉄腕アトムは最終回、人類を守るために爆弾を持って太陽に突っ込んでいきますよね。僕は奇しくも、2003年という年に、アトムスーツを着て太陽の塔に上ることにより、自分の中で一番だったアトムスーツというキャラクターを捨ててしまったんです。次に何が生まれてくるか見当もつかない中で。

**大宮** ヤノベさんの作品は、見ていて勇気が湧く感じがします。

**ヤノベ** 自分があったらいいなと思うものを作っているだけなんです。巨大なロボットが火を噴いたらおもしろいとか、多くの男の子が考えるようなことでしょう。

**李** 「20世紀少年」という漫画を地で行っているみたい。現実になりそうもないことを実現する行動力がすごいですよ。

**ヤノベ** 作品を見て喜んでもらいたいというより、自分の中で一番だったアトムスーツというキャラクターを捨ててしまったんです。次に何が生まれてくるか見当もつかない中で。

**大宮** ヤノベさんの作品は、見ていて勇気が湧く感じがします。

**ヤノベ** そんな感じかもしれません(笑)。

### 「どこにも属していない」感覚

**李** 僕は主にカフェやショップの空間デザインをしているんですが、多くの建築やインテリアが未だに視覚のみで創られ体験されていることが面白くないと思っていました。それで、最初に作ったのが無響室によるアクセサリーショップ。無響室とは音響実験に使われる反響のない空間です。音は波として様々な面に反響してそれらの総和として聴覚を通じて知覚されるのですが、音が響かない無響室にいますと、重心バランスや距離感など自分の身体感覚や他者との関係性が明らかになる。